

日本サンゴ礁学会ニュースレター

1998 Vol. 1

Jan.

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society



## 特集

〔日本サンゴ礁学会設立総会報告〕

## 新連載

1. 若手会員の眼
2. サンゴ礁関連施設探訪・・・阿嘉島臨海研究所・・・

Newsletter of  
Japanese Coral Reef Society

## 会長挨拶：[日本サンゴ礁学会ニュースレター発刊にあたって]



今年11月2日に日本サンゴ礁学会が設立されました。ちょうど、国際的には、環境問題が国際社会を揺り動かすほどの大問題として受け止められ、その一環としてサンゴ礁保全も国際的なテーマとなってきたところです。サンゴ礁研究者の間では、かなり前からサンゴ礁の危機が訴えられていましたが、ここ数年の間に、ようやく世界の問題として取り上げられるようになったのです。3年前には、日米豪を中心とする数ヶ国が、国際サンゴ礁イニシャティブ(ICRI)と称する、サンゴ礁保全運動を提唱し、今では、すべてのサンゴ礁国家が参加するようになりました。本年の2月には、東アジア海域のICRIワークショップが沖縄で開催されました。また、今年は、サンゴ礁保全のための国際サンゴ礁年でもあり、いろいろな活動がありました。この祈念すべき年に、日本サンゴ礁学会が設立されたことは、たいへん意義深いことであります。

日本は、元来、国内にサンゴ礁が発達する数少ない先進国の一つです。イシサンゴ類の分類の専門家のヴェロン博士(オーストラリア)は、日本は、先進国の中では、イシサンゴ類の数種が最も大きい国だとさえいっています。これは、大保礁も含んでのことです。にも関わらず、つい最近まで、日本にはわずかなサンゴ礁研究者しかありませんでした。第2次大戦後27年間は、日本のサンゴ礁の主産地である沖縄は、米国の施政権下にあり、沖縄以外の研究者には近づき難い存在でありました。第2次大戦以前には、台湾や南洋群島が日本の領土であり、パラオの熱帯生物学研究所を含め、サンゴ礁研究が活発でした。その時には沖縄のサンゴ礁は、水面下にありました。たぶん、このために沖縄の日本復帰後もしばらくは研究者の来訪が少なかったのでしょう。

日本政府は、米国から、日米経済包括協議の一環として、ICRIの提案を受けた時には、かなりギクシャクしていたという感じを受けました。サンゴ礁は、熱帯の問題であり、日本には関係ないという受取が方が普通であったのでしょうか。だから、数年前に、造礁サンゴが東京湾にもあるという印象的な番組をNHKが流した時には、びっくりした人が多かったようです。その頃から日本のサンゴやサンゴ礁の、特に生物学的研究が増えたと思います。(地質学的、地理学的研究は、比較的早くから増えていたと思います。)

それで、サンゴ礁学会の設立大会の発表者が60人にもなり、しかも、きわめて多様な内容の報告があったことは、一挙に多数の花が咲き揃ったようで、感激しました。サンゴ礁学会の設立、そして、このニュースレターによる情報交換により、日本にサンゴ礁研究の花が開き、多くの実をむすぶことを祈ります。

日本サンゴ礁学会会長 山里 清

## 特集

### [日本サンゴ礁学会設立総会報告]



▲ 設立記念公開講演会の会場風景



▲ ポスター発表も盛況でした

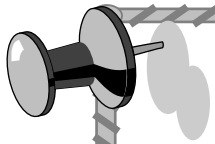


◀ 懇親会のにぎわい

総会の様子



p.3につづく



## 目次

- 会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.2
- 設立総会の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.2-3
- 日本サンゴ礁学会設立大会・設立総会議事録・・・・・・ p.4
- 第1回評議員会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.5
- 各委員長所感・抱負・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.6
- 新連載1：若手会員の眼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.6
- 新連載2：サンゴ礁関連施設探訪・阿嘉島臨海研究所・・・・ p.7
- 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.7

# サンゴ礁学会設立大会

設立総会の様子（琉大の河名俊男先生の原稿をもとにしました）

## 総会報告

11月1日

に一般市民向けの日本サンゴ礁学会設立記念公開講演会（沖縄県沖縄タイムス社、および琉球新報社後援）が那覇市の沖縄都ホテルで開催されました。会場には那覇市民ほか多数の方々が来られ、約300名収容の会場は立ち見の方々もおられるほどの盛況でした。沖縄県環境保健部の平良健康部長よりご挨拶をいただいたあと、

4名の講師による講演会が行われました。最初は、西平守孝先生（東北大学理学部）が「命が創り、命を育むサンゴ礁」と題してサンゴ礁の大切さとその保全の重要性について、続いて松本英二先生（名古屋大学大気水圏科学研究所）が「サンゴ骨格年輪による気候復元」についてサンゴの骨格の年輪から最近および過去の気候が高精度で復元する話題を、3番目は、近森 正先生（慶応大学文学部）が「南太平洋の環礁と人間」と題して考古学的な調査に基づく南太平洋の環礁に移住した人々の大航海について、最後に小西健二先生（金沢大学名誉教授）が「陸（おか）にあがったサンゴ礁と沖縄の暮らし」について隆起サンゴ礁がいかに沖縄の暮らしに密接に結びついているかという興味ある話題をお話されました。

11月2日

は、午前中に総会が開かれサンゴ礁学会が設立しました（総会の様子についてはp.4の設立総会報告をご参照ください）。総会に引き続き午後から一般発表が始まり、生物・水産関係の発表に引き続き、地質・地理の発表、さらに午後6時会場をからポスターセッションがおこなわれました。ポスター発表には実際にパソコンを使用した実演もあり好評でした。その後同じ会場で懇親会に移りましたが、懇親会会場に予想を超える参加者で入りきれなかったため、近くのロビーと隣の教室も会場にして、ビールや瓶入りの泡盛を飲みながら懇談しました。

11月3日

は、午前9時から一般発表が続行され、前日に続いて地質・地理の発表があり、その後、環境・保全、および社会・文化の発表がなされた。途中昼休みに評議員会が開催されました（p.5評議員会議事録参照）。大会への参加者は157名が確認されましたが、2日目になって講演要旨集が不足して無料で参加していただいた方が10名おられ、合計167名が参加されました。教育実践研究指導センターは110名収容の、設備の整った会場ですが、大会の2日間とも満席で、さらに会場に多数の椅子を運ぶほどの大盛況でした。



## 日本サンゴ礁学会設立大会 設立総会議事録

日時：1997年11月2日（日）午前9：00～11：40

場所：琉球大学教育学部教育実践研究指導センター

議長：土屋誠・中森亨・菅浩伸

議題および報告事項：①設立委員会からの報告、②会則案・細則案について、  
③会長および役員について、④事業計画案について

### 議事

#### 1. 設立委員会からの報告

設立委員会委員長（茅根創）より、1997年11月2日の日本サンゴ礁学会設立大会に至るまでの経緯が説明された。1996年、パナマで開かれた第8回国際サンゴ礁シンポジウムにおける日本人研究者の集会で最初の設立準備委員会が開かれ、その後、沖縄や東京での多数の準備委員会を経て、1997年11月1日の設立委員会が開催されたことが報告された。その間、学会設立希望者の名簿作成、アンケートによる希望者の動向調査、他の学会会則の検討が行われ、日本サンゴ礁学会会則案・細則案が決定されたことが説明された。設立大会総会の議長として土屋誠、中森亨、菅浩伸の3氏が推薦され、承認された。

#### 2. 会則案・細則案について

設立委員会委員長より日本サンゴ礁学会会則案・細則案が朗読された。その際、11月1日の設立委員会で検討された一部の表現に関する訂正がなされた。その後、会則案・細則案全般について質疑応答を行い、以下の表現に関する問題点が指摘された。

・第1条の日本サンゴ礁学会の英語名(The Coral Reef Society of Japan)に"Study"を含める必要がある。

・第2条の設立精神の中にもっと熱い想いを込めてほしい。

・第4条に本会の事務局の設置機関を明記する必要はないか？

・学友会員は第8条、5で示された学会誌に寄稿する権利を持っているのか？

・第9条の『返戻』は国庫に戻すという意味で、ふさわしくない。

・第14条1の『…会友会員および団体を…』は、『…会友会員および団体会員・賛助会員の団体を…』に変更するべきである。

・付則1は、『本会則は1997年11月2日より施行する。』の表現が適当。

・総会の議長の選出方法が明記されていない。

・選挙名簿の作成の手順が判りにくい。

・その他、語句の修正に関するもの多数。

これらの中で、明らかな誤りは訂正され、その場で補足可能な問題については担当委員より詳細に説明が行われた。また、学会の英語名、設立精神、事務局の設置機関、学友会会員の投稿の権利、付則1、総会議長選出方法について、後日の会議で更に検討を加えることが決定された。審議の結果、後日検討される事項を除き、日本サンゴ礁学会会則・細則は賛成多数で承認され、日本サンゴ礁学会が設立された。

会則の付則3に従って、設立委員は日本サンゴ礁学会評議員に移行することが議長より報告された。評議員27名『上田不二夫（沖縄大学）、大森保（琉球大学）、大森信（東京水産大学）、茅根創（東京大学）、河名俊男（琉球大学）、菅浩伸（岡山大学）、工藤君明（海洋科学技術センター）、小西健二（金沢大学）、下池和幸（阿嘉島臨海研究所）、近森正（慶応大学）、辻喜弘（石油公団）、土屋誠（琉球大学）、中井達郎（日本自然保護協会）、中野義勝（琉球大学）、中森亨（東北大学）、西平守孝（東北大学）、野崎建（電子技術総合研究所）、浜田隆士（放送大学）、林原毅（西海区水産研究所）、日高道雄（琉球大学）、藤原秀一（海中公園センター）、堀信行（都立大学）、松田伸也（琉球大学）、目崎茂和（三重大学）、本川達雄（東京工業大学）、山里清（名桜大学）、横地洋之（東海大学）』が紹介された。

#### 3. 会長および役員について

付則3に従い、設立当初の役員が設立委員会によって選ばれ、本会の会長に山里清氏が決定されたことが報告された。会長より学会設立の挨拶が行われ、委員長など（副会長：近森正、会計監査：長谷川均（国土館大学）、大葉英雄（東京水産大学）、企画委員長：中森亨、編集委員長（学会誌）：土屋誠、編集委員長（ニュースレター）：野崎建、選挙管理委員長：工藤君明、事務局長：茅根創）が紹介された。

#### 4. 平成10年度事業計画案について

平成10年度の事業計画案についてそれぞれの担当委員より説明された。

1)学会誌と会報の出版について（土屋）：早急に編集委員会で論文投稿規定を作成し、原著論文を広く募集し、学会誌の発刊に向けて努力する。会報の作成には多くの情報が必要なためニュースレター編集のための組織造りを行う。

2)予算案について（野崎）：推定の会員数を基に来年度の収入と支出の見積りを行った。詳細な予算案は、会員数が確定してから作成する。

3)学会事務センターへの事務業務の委託について（茅根）：事務局より本会の名簿管理・会費収・会報や学会誌の発送に関わる業務を学会事務センターに委託することが提案され、審議の結果承認された。

4)国際対応（中森）：学会と社会との接点を考えると、今後国内他学会との連携や国際対応がますます重要となることが指摘された。この問題については、企画委員が検討する。

以上（中森 亨）

## 日本サンゴ礁学会第1回評議員会議事録

日時：1997年11月3日（月）12時20分～13時15分

場所：琉球大学教育学部

出席者：山里 清（会長）、大森 保、大森 信、茅根 創、河名俊男、菅 浩伸、工藤君明、小西健二、下池和幸、近森 正、辻 喜弘、土屋 誠、中井達郎、中野義勝、中森 亨、野崎 健、林原 毅、日高道雄、藤原秀一、堀 信行、松田伸也、目崎茂和、横地洋之（以上23名）

### 議事

1. 設立総会・大会の報告（河名）
2. 入会申し込みの現状の報告（茅根）
3. 会則の修正：以下の議論を考慮し、また大会での指摘を参考にして、工藤が修正する。  
（1）学会の英文名称：Studies が必要という意見があったが、複数のネイティブに確認した結果、なくても学会の意味は通るし簡潔な方がよい。The Coral Reef Society of Japan か Japanese Coral Reef Society について、評議員内のアンケートで決める（補足：その結果、Japanese Coral Reef Society に決定）。
- （2）事務局住所：資金を保管する以上、住所は必要。本文か付則かを検討する。
- （3）付則1：「本会則は1997年11月2日より施行する」と変更する。
- （4）学会誌への投稿の権利（通常会員以外の投稿も受けつけるか）：学会誌の質をあげるためには、広く原稿を募った方がよいとの意見が多かった。編集委員会で議論する。
- （5）総会と評議員会の議長の選出方法：総会は大会主催者から。内規で決める。
- （6）目的に「熱い想いを」入れてほしいとの意見について：会則に込められている。
4. 今後の進め方  
（1）ニュースレター1号。本総会・大会の報告と入会募集のためにニュースレター1号を作成して送る（編集担当は野崎）。ニュースレターの発送は、12月中に事務局が行なう。少なくとも1号は入会勧誘のため、入会会員以外にも送る。
- （2）各委員会の構成  
企画：中森 亨（委員長）、各委員会委員長  
学会誌編集：土屋 誠（委員長）、大森 保、河名俊男、工藤君明、日高道雄、目崎茂和、近森 正  
ニュースレター編集：野崎 健（委員長）、小西健二、下池和幸、中井達郎、藤原秀一  
選挙管理：工藤君明（委員長）、菅 浩伸、中野義勝  
事務局：茅根 創（事務局長）、辻 喜弘、日高道雄、松田伸也  
（3）企画委員会（中森）：サンゴ礁学会の事業として「日本のサンゴ礁研究」の刊行を提案する。評議員に執筆を依頼したい。海中公園センターから支援が受けられるので、その一部を学会の資金に回してはどうか。版権の問題、分担の原案を企画委員会で検討する。国際対応、国内他学会との連携については、今後議論する。
- （4）学会誌編集委員会（土屋）：まず、投稿規定を作成する。
- （5）ニュースレター編集委員会（野崎）：第1号は、総会と大会の案内と入会募集のほかに、連載を始めることを検討中で、今月中に編集する。
- （6）事務局：入会申込者の名簿を作成する。賛助会員、団体会員の募集を始める。外部委託の契約を始める。
5. その他  
名誉会員として、川口四郎さんと平田国雄さんが推薦され、賛成多数で了承された。
6. 次回評議員会と総会  
総会は、今回と同じ時期（11月頭）に東京で開催する。評議員会は、1998年5～6月に1回開く。

以上（茅根 創）

### 編集委員会からのお知らせ（入会のご案内と本号添付資料について）

- 1) 今回は新規会員の勧誘を兼ねて非会員にもニュースレター創刊号と入会申込書をお送します。
  - 2) 会員には会員名簿、会則、および冊子「日本のサンゴ礁」（財団法人海中公園センター提供）が添付されています。
  - 3) ニュースレターの配布と早期入会の特典について：ニュースレターは、第2号までは現在配布している方全員にお送りいたします。第3号からは会員だけへの配布に限らせていただきます。また、2月10日までに入会申込書をお送り下さった方には、以下のもののいずれかをお送りいたします。「日本のサンゴ礁」（海中公園センター編）、「地球規模変動に対するサンゴ礁の応答に関する国際シンポジウムプロシーディングス」（地質調査所編）、「日本サンゴ礁学会設立大会講演要旨集」（日本サンゴ礁学会編：すでに残部がありませんのでコピーです）。残部の都合でご希望に添えない場合があるかも知れませんが、ご希望の優先順を申込時にお知らせください。
- ※入会案内および冊子「日本のサンゴ礁」に関しては、添付書類を参照してください。

# 各委員長所感・抱負

①企画 ②論文誌編集 ③選挙管理の各委員長 ④事務局長

1. 中森企画委員長：サンゴ礁学会の設立に際しましては、皆様の多大なご声援とご助力を受け賜わりまして、本当にありがとうございました。おかげさまで、日本に新しい学会を作るといふ当初の不安は沖縄における設立大会の盛り上がりによって完全に払拭され、この上もないスタートをきれたと思います。私は、企画係を仰せつかりましたが、この係の役割はその様な熱い雰囲気をつつまでも継続させること自認しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度は『日本におけるサンゴ礁研究』の出版とデータベースの編集を最大の目標に掲げ、これらの計画を実行に移していく所存です。また、もともと企画係は何でも係としての意味合いが強い手際は悪いですが、どのようなことでもやらせていただきます。ご相談ください。

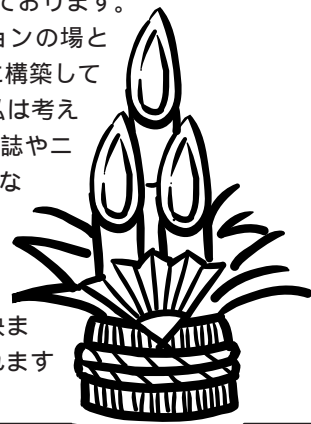
2. 土屋論文誌編集委員長：学会誌は学会の「顔」ですから責任の重さを痛いほど感じています。みなさんに教えていただきながら仕事をしていこうと思っていますのでよろしくお願いいたします。どうせ作るのなら世界から注目されるものを作ろうという大きな夢は持っています。また会員の皆さんや、サンゴ礁に関心がある人たちと一緒に作っていくべきものであると思っています。学会誌に関するアイデアをお寄せ下さい。当然のことですが、この仕事は論文原稿が順調に集まらなければ成り立ちません。悲鳴を上げるくらい集まる状態になるのが最高です。まだ体裁も投稿規定も決まっていない状況ですが、是非投稿の準備を始めていただきますようお願いいたします。

3. 工藤選挙管理委員長：サンゴ礁に関連するいろんな分野の研究者とサンゴ礁に関心の高い多くの人達が参加して交流できる場ができたことはとても素晴らしいことです。学会を維持しさらに大きく発展させていくことはこれまで以上に大変なことです。私は選挙管理委員長として学会の運営に微力を尽くす所存です。現在の評議員会は設立準備委員会がそのまま移行しておりますが、第1回通常総会およびその後の運営を会員の投票で選ばれた新しい体制で実行できるよう選挙を実施することになります。

本学会は学際的で分野によって会員の数も異なりますし、地域的な難しさもあります。会員の声もれることなく学会運営に活かされるような役員選挙ができればいいなと思っています。現在の選挙細則はあくまでも暫定的なものですから、選挙管理委員会でよく研究し、よりよいものにしていきます。

4. 茅根事務局長：1996年6月26日、パナマにおいて日本サンゴ礁学会（仮称）設立準備委員会が発足しました。その後、度重なる会合と電子メールによる議論、関係する研究者等へのアンケート、3号にわたるニュースレター設立準備号の配布を経て、いよいよ日本サンゴ礁学会が設立いたしました。設立の背景としましては、サンゴ礁研究の重要性が増しており、それに伴って研究者数が増加し、その所属も大学ばかりでなく国公立の研究所、官庁、民間などに広がっていること、さらに研究分野が様々な分野に渡っていることがあります。こうした様々な所属と分野の研究者の議論とコミュニケーションの場を作るとともに、社会的な要請に応え、研究者を育成し、国際的な研究ネットワークに対応するために、学会という場を作ることが適当であると、私たちは考えました。今後、こうした意義を十分に活かす学会を作るよう努力して行きたいと考えております。

設立当初の理念である学際的な研究者のコミュニケーションの場としての学会をどのように維持し、「サンゴ礁学」をどのように構築していくかは、本学会のもっとも重要な使命の一つであると、私は考えます。そのためには、大会運営やシンポジウムの企画、学会誌やニュースレターの編集、会則や選挙など、学会運営のいろいろな場面で、この点に考慮することが必要ではないでしょうか。しばしば隣接する分野の研究者から、私が入ってもよいのでしょうかとときかれます。しかしながら本学会は、まさに今、学会に参加される方によって活動内容や分野も決まってくるものです。できる限り多数の方が本学会に参加されますよう、心からお願いいたします。



## 新連載 1. 若手会員の眼

今日は、はじめまして。

東京大学理学部地理4年、名前を海沢と改名してしまおうとも思ってしまうほど海好き人間の梅沢と申します。設立大会閉会後に酒に酔った勢いで、学生こそが学会を盛りあげていかなくてはと豪語して編集委員長にメールしたのが運の尽きで、学生の編集委員を任せられ、本欄を担当させて頂くことになりました。よろしくお願い致します。

さて、11月にサンゴ礁学会が発足してから早2カ月がたとうとしています。皆様いかがお過ごしでしょうか。設立大会には日本全国から、学生を含め多くの方が参加されていました。単なる傍聴者であった僕は、名前しか知らなかった先生方の顔と名前が一致したとウキウキしているミーハー野郎（死語？）であったことは否めませんが、何よりも刺激となったのは、多くの女子学生と知り合えたこと（じゃなくて）、いろいろな大学でサンゴ礁に関わって研究をしている多くの学生と知り合えたことでした。同年代の仲間の存在は、良き相談相手、良きライバルとして、お互いの研究の活性化につながると思います。

しかしながら我々学生（特に学部生）は、このような場に顔を出す機会にはなかなか恵まれないため、どうしても盲目になりがちです。そこで、このような誌面やネットを通じて、我々が積極的に意見を交換し合い、お互いに、そして既に第一線で研究されている先生方にも刺激を与えていくようなシステムを作っていくことが、各々の研究、はたまたサンゴ礁学会全体を押し進めていくことになることだと思います。サンゴ礁学会はまだ歩み始めたばかりのよちよちの赤ん坊ではありますが、それは逆に、学生が他の学会にないような色に染めていき、目上の人に遠慮することなく発言、発表をできるような雰囲気をもった学会を作り上げていくチャンスでもあります。ベテランばかりに頼って若手の元気がないと某巨人軍のようになってしまいます。先生方と大論陣をはれる、はりたいという野望をもつ学生、僕のようにイキのいいことだけが売りの学生、少しでも興味をもたれた方は軽い気持ちで参加されてみてはいかがでしょうか。

これを御覧になっている先生方には、学生に積極的に参加するように呼びかけて下さるようお願い致します。そうすれば、学生が一人歩きするようになり先生方の負担が減ること請け合いです。下手な知恵をつけて手元から離れてしまうかもしれませんが

今後、学生を中心とした若手会員の声を拾いあげていきたいと考えています。御意見などございましたら、メールでお寄せ下さい。



その美しさは世界有数といわれる沖縄の慶良間諸島海域。透明度の高い水。生き生きとした造礁サンゴ群集。阿嘉島臨海研究所は、(財)熱帯海洋生態研究振興財団の現地研究部門として、地元の協力のもと1988年7月に、慶良間諸島の一つ阿嘉島に誕生しました。この財団は、熱帯海域の生態系やその有効な利用についての基礎研究を行う場を広く国内外の研究者に提供するとともに、サンゴ礁の環境保全や地域振興に寄与することを目的として、保坂三郎理事長と大森信理事(東京水産大学教授)らの熱意によって、科学技術庁の認可を受けて設立されました。また研究所の設立には、戦前に世界のサンゴ礁研究をリードしたパラオ熱帯生物研究所の当時の研究員であられた故元田茂先生らの思いも込められており、寄贈していただいた蔵書は元田文庫として研究所に保存されています。



● 阿嘉島臨海研究所の外観

研究所は阿嘉港から約300m離れた山のほとりの斜面に建てられた4階建ての白い建物



● 美しい慶良間諸島のサンゴ礁

で、1階は顕微鏡観察などを行う測定室と海水が使える飼育室、2階はセミナー室とコンピューター室および宿直室があり、3,4階にはレストランを備えた最大18名が利用できる宿泊施設も備えています。フィールドワークには、12名乗りの115馬力FRPボート1台と、船外機付きゴムボート(Zodiac)2台、スキューバ潜水器材などが使用できます。現在、3名の研究員と1名のコックが常駐し、外来研究者のお手伝いをするとともに、主な研究テーマとして、造礁サンゴの有性生殖を利用したサンゴ礁造園の基礎研究、サンゴ礁の環境保全に関する研究、ヤコウガイやアサヒガなど

熱帯・亜熱帯海域の水産増養殖に関する研究などを進めています。そして、今日に至るまで、国内外の多くの研究者が施設を利用し、それらの研究成果は、年1回発行の機関誌「みどりいし」に掲載されています。

**地** 球規模の環境悪化が危惧される昨今、国際サンゴ礁イニシアチブでもサンゴ礁保全のための啓蒙教育活動の重要性が指摘されています。このような現状において、阿嘉島臨海研究所では研究だけでなく、地域住民を対象としたニュースレター「アムスルだより」を2ヶ月に1回発行したり、マリンスクールを開催するなど、啓蒙教育活動にも力を入れています。阿嘉島臨海研究所は来年で設立10周年を迎えます。今後も各方面の研究者の方々と協力しながら研究を進め、その研究成果を生かしてサンゴ礁の環境保全に取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様方のご支援ご協力のほどよろしくお願い致します。



● セミナー室

## 編集後記

新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞ宜しくお願いします。

日本サンゴ礁学会ニュースレター創刊号をお届けします。拙速ですが、新年にやっと間に合わせることが出来ました。

急な原稿を執筆していただいた皆様、デザインを引き受けていただいた原部さん(e-mail: <YRY01205@niftyserve.or.jp>)、ニュースレターの綴じ込み、発送を担当していただいた事務局の皆様、ほんとうにありがとうございます。

さて、第2号からは日本サンゴ礁学会設立記念講演会(本号3ページ参照)で講演頂いた近森、小西両先生による新連載を開始します。また、会員の意見を発表する場としてのフォーラム欄の企画も検討中です。

編集企画に関する皆様のご意見、アイデアをお待ちしています。編集委員会へe-mailでメイリングリスト<JCRS-n@geogr.s.u-tokyo.ac.jp>でお願いします。なお、ニュースレター編集委員については日本サンゴ礁学会第1回評議員会議事録に掲載されています(p.5参照)。

### < 連絡先 >

編集委員長: 野崎 健: <e6806@etl.go.jp> 〒 305-8568 茨城県つくば市梅園 1-1-4  
電子技術総合研究所、エネルギー部、Tel:0298(54)5793、Fax:0298(54)5806  
事務局 長: 茅根 創: <kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp>  
〒 113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学系地理、Fax: 03-3814-6358

世界初

# 藍藻に着目した 驚異の浄化力。

「グリーンカラム」は、これまで誰も注目しなかった藍藻類に着目した

まったく新しい生物浄化装置です。

アオコで知られる藍藻類は、これまで水槽の嫌われ者として扱われていました。

でも実はこの藍藻類こそ、地球に海が形成されて以来、

自然環境の微妙なバランスを保つ

重要な役割を担ってきたのです。

「グリーンカラム」は、この自然の自浄作用を

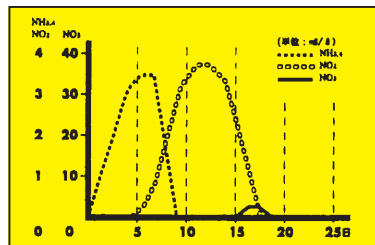
水槽内に再現することに成功しました。

これはまさに逆転の発想といえます。

## グリーンカラム

### 水換えの回数が飛躍的に減ります。

従来のバクテリア商品は好気性バクテリアであり、強い毒性をもつアンモニアを亜硝酸→硝酸塩へと硝化させてくれるのはよく知られたところですが、この硝酸塩は比較的毒性が弱いというものの、好気過の最終残留物として蓄積されるため、定期的な水換えはかせないものでした。しかし、「グリーンカラム」を使用することによって、カラムに付着した藍藻類が硝酸塩を栄養源として取り組むため、水換えの回数は飛躍的に減ります。このように藍藻には非常にすぐれた窒素、リン等の栄養塩類を除去する作用があります。

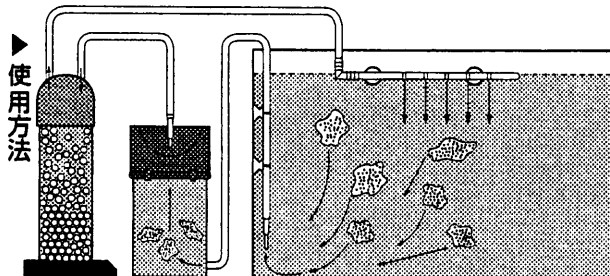


### カラムのグリーンは水質のバロメータ。

「グリーンカラム」は設置してしばらくすると、カラム内のカラスビーズに付着した藍藻の働きにより、グリーンに着色していきます。何百種類とある藍藻類の中から、今のあなたの水槽の状態に応じた藍藻が付着するため、その色の具合は水槽によりそれぞれ違います。まさに自然の力を利用した水質のバロメータなのです。状態のよい水槽の場合は、カラムはライトグリーンに輝きます。また、汚れが目立ってきたら(茶色に変色等)、ガラスビーズを洗浄することにより、何度でも使うことができます。「グリーンカラム」は蛍光管とカラム部を簡単に取り外して、メンテナンスがしやすいよう設計されています。

### 繁殖の成功率を高めます。

ディスカスやアピストなど、弱酸性の軟水を好む魚の繁殖にチャレンジする場合、その故郷アマゾンに水質環境を近づけることによって、繁殖の可能性は数段高まります。ここで注目したいのが、藍藻類のもつ金属イオン除去作用です。現在、硬度や導電率を下げて軟水を作るには、イオン交換樹脂やROフィルター等を使った軟水器が使われていますが、その水作りの費用と時間の負担は大きく、残念ながらすべてのアクアリストが手軽にできる方法とはいえません。しかし「グリーンカラム」ならただ設置するだけでこの繁殖に適した水質作りを可能にします。



※この商品は外部フィルターと併せて使用してください。

#### ●藍藻類とは？

藍藻類は汚れた水の中の有機物を栄養源にして、光合成をしながらどんどん増殖していきます。だから本来なら水をきれいにしてくれる植物性プランクトンなのです。藍藻類は原始の海の時代より地球と共生してきました。青い空と穏やかな気候など自然環境の維持に、藍藻類は欠かすことのできない大きな役割を担っています。しかし霞ヶ浦の例に見られるように、現在の湖沼は生活排水や産業排水による富栄養化のため、藍藻類の一種であるアオコ(ミクロキストス属、アナバ属)の異常発生を招きました。そのためカビ臭い異臭など弊害ばかりが目立ってしまい、藍藻類が本来もつ、そのすぐれた作用はほとんど知られずにきたのです。

(有)土浦観賞魚

〒300-0821

茨城県土浦市蓮河原新町2-12

TEL. 0298-22-8975

FAX. 0298-26-3113

